チャレンジ！！オープンガバナンス 2022 市民／学生応募用紙

自治体提示の地域課題名（注１）	No.	自治体提示の地域課題名	自治体名
	-（事務局用）	オープンデータを長浜市民にとって身近なものにするには	長浜市
チームがつけたアイデア名（公開）（注２）	ながまっぱ　～みんなでつくろう！長浜子育てみちしるべ～		

（注１）地域課題名は、COG2022 サイトの中に記載してある応募自治体提示の地域課題名を記入してください。

（注２）アイデア名は各チームで独自にアイデアにふさわしい名前を付けてください。これは自治体提示の地域課題名とは別です。

１．応募者情報　赤字部分は削除して該当の番号を記入

チーム名（公開）	ペルソナリダー	
チーム属性（公開）	１．市民、2．市民／学生混成、３．学生	3
メンバー数（公開）	４ 名	
代表者（公開）	服部慎吾	
メンバー（公開）	石川新、井上汐音、蒲浦和季、中村凛之介	

【注意書き】※　必ず応募前にお読みください。

＜応募の際のファイル名と送付先＞

1. 応募の際は、ファイル名を COG2022_応募用紙_具体的チーム名_該当自治体名にして、以下まで送付してください。東京大学公共政策大学院の COG2022 サイトにある応募受付欄からもアクセスできます。admin_cog2022@pp.u-tokyo.ac.jp

＜応募内容の公開＞

2. アイデア名、チーム名、チーム属性、チームメンバー数、代表者と公開に同意したメンバー氏名、「アイデアの説明」は公開されます。
3. 公開条件について：
   「アイデアの説明」でご記入いただく内容は、クリエイティブ・コモンズの CC BY（表示）4.0 国際ライセンスで、公開します。ただし、申請者からの要請がある場合には、CC BY-NC（表示ー非営利）4.0 国際ライセンスで公開しますので、申請の際にその旨をお知らせください。いずれの場合もクレジットの付与対象は応募したチームの名称とします。
   （具体的なライセンスの条件につきましては、https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/legalcode.ja、および、https://creativecommons.org/licenses/by-nc/4.0/legalcode.ja　をご参照ください。また、クリエイティブ・コモンズの解説もあります。https://creativecommons.jp/licenses/）
4. 上記の公開は、内容を確認した上で行います。（例えば公序良俗に違反するもの、剽窃があるものなどは公開いたしません）
5. この応募内容のうち、「自治体との連携」は、非公開です。ただし、内容に優れ今後の参考になりうると判断したものは、公開審査後アドバイスの段階で相談の上公開することがあり得ます。

＜知的所有権等の取扱い＞

6. 「アイデアの説明」中に、応募したチームで作成・撮影したものではない文章、写真、図画等を使用する場合、その知的所有権を侵害していないことを確認してください。具体的には、法令に従った引用をするか、知的所有権者の許諾を取得し、その旨を注として記載してください。「自治体との連携」中も同様でお願いします。
7. 「アイデアの説明」中に、人が写りこんでいる写真を使用している場合、使用している写真に写りこんでいる人の肖像権またはプライバシーを侵害していないことを確認してください。

＜チームメンバー名簿＞

チームメンバーに関する情報を最終ページに記載して提出してください。（2．の扱いによる代表者氏名を除き、他のメンバーに関する情報は本人の同意があるものを除き COG 事務局からは非公開です。詳細は最終ページをご覧下さい。）

アイデアの説明全体が肖像権・著作権等を侵害していないことの確認	○

2．アイデアの説明（公開）　(1) アイデアの内容（公開）

（1）アイデアの内容、（2）アイデアの理由、（3）実現までの流れ、の三項目に分けて記入してください。

必要に応じて図表を入れていただいて結構です。

(1) アイデアの内容（公開）

アイデアは、対象とする課題解決のために、何をする社会的な活動（サービス）なのか、をわかりやすく示してください。これが将来実現した場合、**魅力的で新規性があり、実践したくなり、活用してみたくなる**、そしてその結果として、課題が解決される、そんな**わくわく感のあるアイデア**を期待します。**２ページ以内**でご記入ください。

＜応募チームとして解決したい課題の要点はこれ！をごく短く書いてください＞

市民とオープンデータの接点をつくりたい！

＜この課題解決のために「何を」するアイデアか、それを「誰が」「いつ」「どこで」「どのように」するかをわかりやすく書いていきます＞ ＜アイデアが具体的に実行される場面を想定してください。＞

＜よいアイデアを生むには関連データの分析確認とデザイン思考によるアイデアを使う人への共感が必要です＞

本提案は、市民とオープンデータの接点を創り出し、市民がオープンデータに興味を持ったり、オープンデータを活用するようになるきっかけを作るものである。市民には育児系 Web サービスを通じてオープンデータと触れ合ってもらう。いくつもの用法があり、いくつものオープンデータとの接点を設けているため一概に言うことはできないが、簡単にまとめると、「**市民**」が「**育児情報を発信、収集する**」とき「**Web 上**」で「**オープンデータに触れる**」ことができる施策となっている。

《コンセプト》

行政からのオープンデータ × 市民からのオープンデータ ⇒ 育児の負担軽減

《サービス名》

ながまっぱ　～みんなでつくろう！長浜子育てみちしるべ～

《由来》

- 長浜の「なが」
- ママの「ま」
- パパの「ぱ」
- マッピングする人＝mapper の「まっぱ」
- 赤ちゃんが生まれた姿＝真っ裸の「まっぱ」

《サービス概要》

- 育児系 Web サービス
- マップ上に育児関連施設等のマッピング
- Wikipedia のような事実記事（長浜 Wiki）と口コミ情報
- マップはオープンストリートマップを活用
- カテゴリー別（飲食店、公園、保育施設・・・）、機能別（滑り台、砂場、ボール遊び）でフィルターをかけることができる
- 居住区域や子どもの年齢、通っている子どもが保育園の場所を登録することでおすすめの場所が表示されるリコメンド機能

《市民》

- どこに何があるか、マップ上にマッピングが可能
- 長浜 Wiki の作成・編集、口コミの投稿が可能
- 施設の保存が可能
- 口コミを書き込む人で検索ができる
- オープンストリートマップで地図情報をより詳しくすることが可能

2．アイデアの説明（公開）　(1) アイデアの内容（公開）

《投稿の活発化》

- ランク制度を導入
  - ○ 投稿数、投稿に対するいいね数に応じて昇級していく
    - ■ いいね数は口コミを参照する際にも判断の基準になる
  - ○ 投稿が多くなることで、リコメンド機能が有効に働くという利点を設ける
- 長浜 Wiki 編集イベント「長浜 Wiki タウン」
  - ○ 日本にも広がりつつあるウィキペディアタウンを模した企画
  - ○ 長浜では 2022 年 12 月 4 日に初めてウィキペディアタウンが開催され、計 15 名が参加
  - ○ イベントと Web サービスの連携で投稿の活発化を促す

《リーチ方法》

1. 市の広報より宣伝をする
2. イベント開催時の宣伝
3. 市内の子育てコミュニティに呼びかける

《ポイント》

- Web ページでネット上に公開されることで長浜 Wiki がオープンデータに
- 行政が出しているオープンデータを使いつつ、市民からの情報で**抜け目を無くす**
- 全国版サイトにはない**超ローカル**情報の集積地にする
- 長浜 Wiki の情報である程度の信頼性、客観性を担保
- 口コミに関しては管理者の承認をもって公開される
- 客観的事実無く、口コミだけが独り歩きしないように、**長浜 Wiki のページが無い施設には口コミが出来ない**ようにする
- サイト内の秩序維持のために**ガイドライン**を作成
- マッピングパーティが結果的に育児系 Web サービスを充実させることに役立っている

《サイトデザイン案》

※サイトデザイン上の情報は架空のモノ

パソコン上でどのように表示されるかのイメージである。便宜上、スマートフォンで利用する方も多いと考えられる、スマートフォン上でのデザインについてはかかる費用等を考え、後に検討することとした。

uMap のシステムを参考に初心者でもより分かりやすいデザインにする。

2．アイデアの説明（公開）　(2) アイデアの理由（公開）

(2) アイデアの理由（公開）

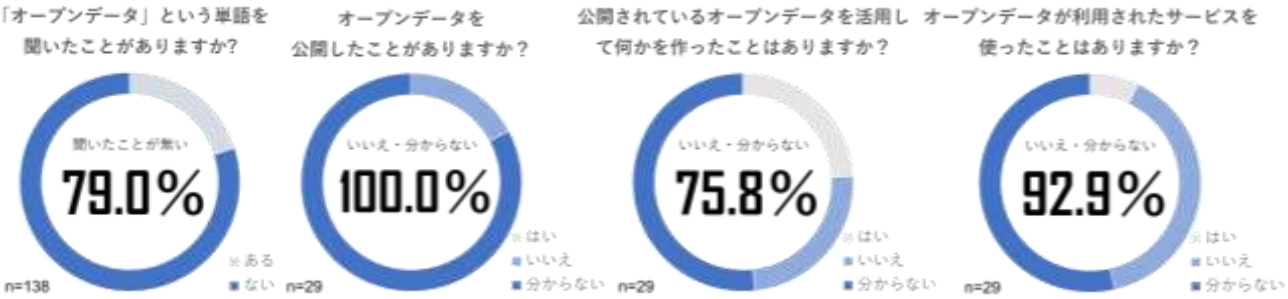
このアイデアを提案する理由（なぜ）について、それを**サポートするデータを根拠として示しつつ 2 ページ以内で説明**してください。ここではアイデアの必要性、効果を確認します。データとは、統計類などの数値データやアンケート・インタビュー・経験の記述、関連の計画、既存の施策などの定性データも広く含みます。データは出所を明らかにしてください。

＜このアイデアを提案する理由（なぜ）を書いていきます＞

＜先の（１）で書いた「何を」「誰が」「いつ」「どこで」「どのように」するというアイデアの内容を支えるための、「なぜ」このアイデアがいいのか実現したいのかを上記のデータを示しつつ書いていきます＞

《オープンデータ認知度調査》

大学生・大学院生を中心に合計 138 人にオープンデータの認知度を調査するアンケートを実施した。



オープンデータという単語を「聞いたことが無い人」と答えた人がおよそ **8 割**を占めた。

また、「聞いたことがある」と答えた人の中で、オープンデータをオープンデータと認識して活用したりしている人はほとんどおらず、認知度の低さが伺えた。「オープンデータを活用して何かを作ったことがあるか？」という質問に対しては 7 人の方が「はい」と答えたが、いずれも大学の授業や研究で論文や発表資料の作成に使用したと回答しており、広く市民が使用できるものに使った人はいなかった。

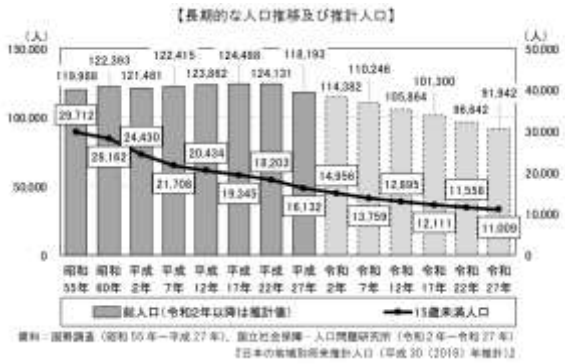
調査対象者の平均年齢はおよそ 21 歳。大学に通う**デジタルネイティブの世代ですらこの認知度では、さらに上の世代での認知度はこれと同等かそれ以下と考えられる。**

《育児を選択するまで》

私たちはこの結果から市民と**オープンデータを直接的に結ぶことは難しい**と考えた。そこで、市民とオープンデータの接着剤として、長浜市・長浜市民にとってニーズのある分野を洗い出す中で、長浜市役所市民活躍課の方、長浜市地域おこし協力隊の方にも話を伺った結果、**育児分野**が最適だろうと考えた。

《育児分野の必要性》

人口減少は長浜市も例外ではない。そんな中で若い世代、子育て世代の流出させないことと流入を促すことは非常に大切である。彼らにとって、育児サポートの充実さを含む「育児のしやすさ」というのは大きな評価ポイントになる。より育児のしやすい環境作りが必要である。



グラフ出典：第 2 期長浜市子ども子育て支援事業計画

さらに、子育ては比較的若年層が通る道であり、データに触れる対象としてふさわしいと判断した。若い世代が順に代わる代わるオープンデータに触れて行くことができると。また、育児分野は必需性が高く、季節を問わないため、オープンデータとの接点として、また、オープンデータへの親しみを生むという点において最適だと判断した。

2．アイデアの説明（公開）　(2) アイデアの理由（公開）

《リサーチ》
分野決定後、実際に育児をしている学生をチームに加え、生の声を聞きながら施策を考えた。しかし、彼女は長浜市在住ではないため、“長浜市での育児”については、長浜市在住の方のお話を沢山聞く必要があった。
育児系の事業を行う会社の副代表の方へのインタビュー、**40 世帯**の親御さん（内長浜市在住が 35 世帯）へのヒアリングを行い、長浜の育児における課題感をリサーチ。以下、ヒアリングの中で我々が解決可能だと判断したもの。

- 公園の情報
  - ○ どこに何の遊具がある分からない　○ 鉄棒がなかなか見当たらず、公園を回った経験がある
- 保育施設の情報
  - ○ 園長先生の雰囲気や考え方を知りたい
- 飲食店の情報
  - ○ 持ち込みできるか　○ 離乳食があるか　○ オムツのゴミが捨てられるか
  - ○ アレルギーの完全除去食の有無　○ キッズスペースの有無※

※実は広さなどに規定が無く、キッズスペースと書かれていても対象年齢や広さがばらばらとのこと。

《ながまっぱの強み》
全国に多くの育児系 Web サービスが存在する中で、ながまっぱの強みは何なのか。それは「**圧倒的ローカルさ**」にある。地元の人しか知らない情報、かつ地元の人が知りたい情報がまとめられたサービスがながまっぱである。
我々は長浜市が出す公園の場所のオープンデータと GoogleMaps を照らし合わせる中で、GoogleMaps にすら無い公園、Google で検索しても画像すら出てこない公園があることを確認した。これらの公園も市民からの投稿で画像や遊具の情報などを網羅することが可能になっている。
また、我々が調べた限りでは各保育園の Wikipedia の存在は確認できなかった。そのうえ、全国規模の大手保育園口コミサイトにおいても、長浜市の保育施設の口コミ数は非常に少なく、口コミの更新は 7,8 年されていない施設がほとんどであった。現状、保育施設について知るには、各保育施設が運営する Web ページを見るほかない。各保育施設が自ら出す情報だけではなく、客観的、事実ベースの記事に加え、口コミ機能があるながまっぱには有用性があると考えている。

《理想状態》
- 市民がオープンデータを公開するようになる
  - ○ 長浜 Wiki の編集
  - ○ オープンストリートマップの編集
- 市民がオープンデータが使われたサービスを使うようになる
  - ○ 当サービスの利用
    - ■ 行政が出すオープンデータ、市民が出すオープンデータ双方に触れている状態
- 市民がオープンデータを活用するようになる
  - ○ 長浜 Wiki を参照する
- 育児の負担を軽減できる
  - ○ ローカルで信頼できる情報がまとまっている
    - ■ 情報を探す時間の削減、判断の材料になる

《利用後の対応》
市民活躍課からは「オープンデータが使われたものであるというネタばらしはしなくても良い。まずは、結果的にオープンデータに接している状態が作れていればよい」ということを伺ったため、Web サービスが活発に動いている状態を我々のゴールとしている。

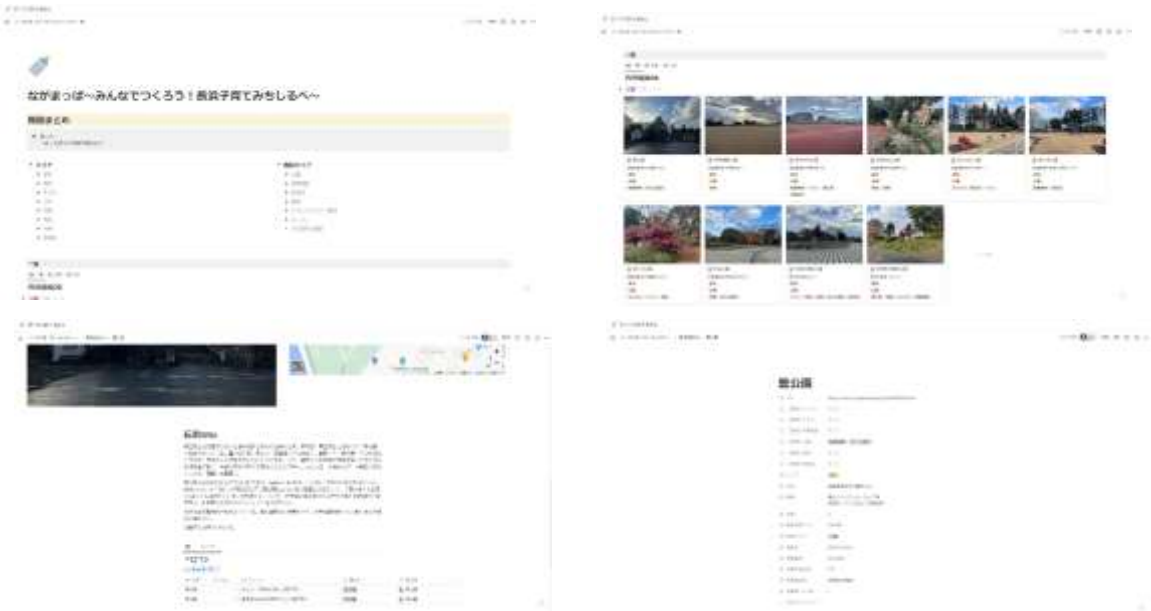
(3) アイデア実現までの流れ（公開）

アイデアを**実現する主体**、アイデアの**実現に必要な資源（ヒト、モノ、カネ）の大まかな規模とその現実的な調達方法**、アイデアの**実現にいたる時間軸を含むプロセス**、実現の制度的制約がある場合にはその解決策等、**アイデア実現までの大まかな流れ**について、**2 ページ以内**でご記入ください。ここでは実現可能性を確認します。

《プロトタイプテスト》

長浜地域おこし協力隊の方にご協力いただき、「notion」という情報共有アプリを使って簡易的な育児関連施設のデータベースを作成。公園、育児施設は実際に行政より公開されているオープンデータより引用した。そこにタグや画像、GoogleMaps の埋め込み、長浜 Wiki の文章、口コミを表示した。口コミに関しては GoogleForms で入力したものが自動で反映される仕組みになっており、今後のプロトタイプテストで活用予定。

※画像は全て我々が撮影したものであり、人は写り込んでおらず、著作権、肖像権の侵害はない



《notion によるこれまでのプロトタイプで分かったこと》

- 現状の notion では相互性が薄い、住民からの投稿のハードルが高くなってしまう
- ログイン機能やリコメンド機能がある中で、セキュリティの面が甘い
- 現状、オープンストリートマップを活用しづらい

notion では我々が理想とする完璧なプロダクトが作れないことが分かった

⇒もし完璧なモノを作る場合、民間企業に委託し新たなプロダクト開発が必要

《スモールスタート》

いきなり理想の状態を目指すには、専門的技術が必要なことや資金面に課題があるため、

スモールスタートで部分的に機能を構築し、効果を検証していく。小さな PDCA をいくつも回していく。

《スモールスタートで必要な資源》

ヒト	ユーザー：子育て世代で協力してくださる方 プロボノ：システム面でのサポート
モノ	ブラウザサービス：notion や uMap など
カネ	無料でできるブラウザサービスを中心に進めるためほぼかからないとする

2．アイデアの説明（公開）　(2) アイデアの理由（公開）

《ブラウザサービス》

①**notion** によるプロトタイプ

⇒現在行っている notion でのプロトタイプテストを継続する

notion 内の編集作業はチームで行い、長浜 Wiki や口コミは GoogleForms で収集をする

できるだけ多くの情報を集め、育児をされている方に話を聞く

改良すべき点、良い点を洗い出し今後の計画に活かしていく

②**uMap** によるプロトタイプ

⇒オープンストリートマップ上に施設等をプロットできるサービス

uMap を利用して実際に地図上へのプロットを体験してもらう

公園のある場所が地図上に一覧化された状態のマップを作成し、使用感などの意見をもらう

オープンデータとの接点となる機能について重点的なプロトタイプテストとし、ユーザーからのフィードバックを元にサービス内容を検討していく。

《行政との協働》

・子育てに関するオープンデータの提供、調査への協力など

・市民活躍課・ながはま市民協働センターによる市民活動団体の紹介、取組の支援など

《大まかな流れ》

プロトタイプテストを繰り返し、改良していくとともに、実現化に向けて行政とも協議を重ねながら進めていく。今回は、行政が主体となって実現する想定で、24 年度以降の予算への組込みを目指す。

プロトタイプテスト⇒行政への提案・協議⇒予算への組み込み⇒実現

《理想状態における必要な資源》

ヒト	行政職員：口コミのチェック エンジニア：開発、改良、メンテナンス 市民：オープンデータの公開、利用、サービスの利用
モノ	プロダクト：民間に委託
カネ	税金：24 年度以降の予算への組込みを目指す

《現状見えている課題》

行政での実現

本提案を行政で実現する場合、長浜市では既に子育てアプリがあるため、そのアプリと今回提案するサービスとの調整が必要になる。しっかりとオープンデータとの接点が設けられているか、市民と行政で双方型のシステムになっているかなど、今回の提案の趣旨となる機能を持つ仕組みとなるよう、既存のアプリの改良を含め、協議・調整していく。行政での実現を第 1 に考えつつも、第 2 プランとして民間での実現も視野に入れて考えていく。

いずれにしても、この内容が構想段階であるため、より良い仕組みとなるようプロトタイプテストを重ね、サービスの有用性やオープンデータとの接点ができるのかを検証していくことが急務である。

《最後に》

部分的な PDCA サイクルを多く回し、よりユーザーに寄り添ったプロダクトを実現させます。

オープンデータが長浜市民にとってより身近になるように活動を続けていきます！